

あらおし悠

挿絵◆はらいた

# 百合ドルミッション!

ライバル解散ハニートラップ

試し読み版

プロローグ	アイドル同士の秘密のキス	006
第一章	後輩たちの秘密遊戯	015
第二章	内気少女を籠絡せよ	072
第三章	小悪魔少女の寂しい本音	124
第四章	友達になれたと思ったのに……	181
第五章	勝つとか負けるとかじゃなく	221
エピローグ	いいこと考えた！	267

# 登場人物紹介

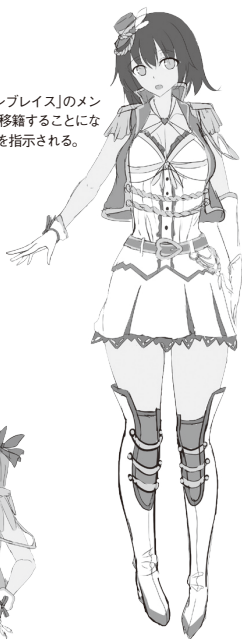
Characters



い な み あ ゆ む

## 伊波 歩

アイドルグループ「エンブレイス」のメンバー。後輩グループへ移籍することになり、瑠歌から秘密作戦を指示される。



もちづき や や  
望月夜々

後輩ユニット「ピュアリーリップ」の一人。歩を明るく迎え入れる。



むら い き ゆ き  
村居紗雪

夜々とともにピュアリーリップを支える。少々内気な性格。



う え の は ら る か  
上乃原瑠歌

「エンブレイス」のリーダーで、歩の先輩。歩とはキスできるほどの特別な関係。

「おねえさま……」

しっとりとした熱い視線に見詰められると、歩の唇は自然にそう動いてしまう。

左側をリボンで束ねた長い髪。勝気さを感じさせる強い瞳。夢のようだといえ、この少女に抱き締められていることの方が、むしろ歩には信じられなかった。

エンブレイスのリーダー、上乃原<sup>うえの</sup>瑠歌<sup>るか</sup>に。

デビューからわずか五年ほどで、ファンでない人にまでグループの名前を浸透させ、アイドルブームをけん引するカリスマ的存在。

どれだけの少女が彼女のダンスと歌声に魅了され、同じステージに立つことを夢見ていることだろう。ついこの間までの歩も、そんなひとりに過ぎなかった。ただ踊ることが大好きな、ごく普通の女の子。

それなのに、無謀にも挑戦したオーディションに合格した日から、日常が一変した。

いつも隣に、瑠歌がいる。追加メンバーとしてデビューしてから幾度となく観客の前に立つたけど、いまだに夢の中にいるようで足元がふわふわとしているみたいに、現実感が薄い。

「おねえさま、あたし……上手にできてましたか？」

だからだろうか。瑠歌の自信に満ちた眼に見詰められると、どうしようもなく不安に揺さぶられた。トップアイドルと比べること自体おこがましいけど、それでも、曲がりなりにもエンブレイスのメンバーとして、完璧なパフォーマンスを見せる義務がある。

すると、瑠歌は細い眉を少しだけ不快そうに寄せ、歩の鼻の頭を指先で軽く弾いた。

「きゃんっ!!」

「もう……いつも言っているのに、まだ分かってないの?」

瑠歌は唇を尖らせ、子供に言い含めるように、歩の強張った肩を何度も撫で下ろした。

「綺麗に歌ったり踊ったりすることは、もちろん大事。観客は感心してくれるでしょう。でもそれだけじゃ駄目。それだけじゃ足りない。見てくれる人を感動させなければ。夢中にさせて、熱狂させる。それが、私たちアイドルのお仕事」

「は、はい……」

瑠歌を指して入ったアイドルの世界。だから、彼女に認めてもらいたい気持ちはどうしても強くなる。それを見透かされ、何度も同じ指導をされた。私ではなく、ファンの方を見なさいと。

「そういった意味で、今日の出来は……そうね……」

トップグループを率いるリーダーの目は甘くない。練習で幾度となく悔し涙を流したことを思い出し、抱き締められている温かい感触も忘れて身体が強張る。

「……まあ、及第点、かしら。ステージで不安そうに仲間の方を窺うこともなくなつたし、ダンスもこなれて躍動感が出てきたし。でも満点じゃないわ。なにが足りなかったのか、自分なりによく考えなさい」

「は………はいっ!」

先輩たちと比べるまでもなく、至らない点ならいくらでも思いつく。大きく目を見開き夢中で返事をする、彼女は、まるで妹の成長を見守る姉のように目を細めた。

「それじゃ、硬い話はおしまいにして……」

急に、声が低くなる。部屋にはふたりしかないのに、周囲の目を気にするアイドルの性だろうか。でも、秘密めいたその響きが、歩の心臓を期待で大きく跳ねさせた。

「頑張った娘にはご褒美をあげなくちゃ、ね」

微笑みながら、瑠歌の小指が歩の唇をスツと掠める。髪が逆立つような甘い静電気で身体が震える。まるでそれが合図であつたかのように、歩は、うつとりと眼を閉じた。

さっきとは違う緊張が、熱い吐息となつて漏れる。それに絡みつくように、別の吐息が近づいてくる。ふわりと柔らかい感触が、唇に重なつた。歩は、反射的に彼女の背中に腕を回してしがみついた。

「……………は、ン…………」

小さな喘ぎが瑠歌の唇に吸い込まれていく。わずかに身じろぎすると、触れ合つた唇同士が擦れて、頭の中が心地よく痺れる。

（ああ……………あたし……………）

キスをしている。瑠歌と唇を重ねている。

誰かに知られでもしたら即スキャンダル。女の子同士なら、遊びでチュツとするのはよくあること。けれどもこれは、言い訳のしようがない、本気の口づけ。夢を売るアイドル

にあるまじき、ふしだらな行為であることくらい、歩にだって分かっている。それでも、瑠歌の唇は蕩けるように甘く、虜になったように離れられない。

(ああ……。ふ、ン……。あんっ……)

いつから彼女とこんな関係になったんだろう。思い出そうとするけれど、瑠歌にきつく抱き締められると、それがあまりに気持ちよくて、思うように頭が働いてくれない。

「……………あ」

背中を走るゾクゾクが、歩の記憶を呼び起こした。エンブレイスのメンバーとして初めてステージに立った日の夜、こんな風に、瑠歌に「ご褒美」を貰って――。

「ん……。ふあ……。……。ン、あッ」

その時の衝撃が快感と共に甦り、歩の呼吸を激しく乱す。最初はもちろん驚いた。けれども、瑠歌の腕の中にいる悦びが、他の全ての感情を押し流していた。レッスンの厳しさに挫折しそうになったことも、先輩たちのレベルに追いつけない悔しさに何度も涙を流したことも。そうして頑張った結果が、この「ご褒美」なのだと思ったら、ファーストキスを同性に奪われたことを疑問とも思わなかった。仲間として認める儀式のようにさえ思えて、むしろ誇らしかったほど。

——これは、私と歩、ふたりだけのお祝い……。

耳の奥に残る、あの時の瑠歌の囁き。他のメンバーにも、もちろんファンにも知られてはいけない秘密の関係。

その瞬間だったのだと思う。憧れは、恋に変わっていた。彼女のために頑張ろう。どんな辛いことも乗り越えてみせようと、新たな決意が心に生まれた。彼女の隣にいても恥ずかしくない自分になれる。彼女のキスが、歩にそう確信させてくれた。

——これから、ふたりきりの時は、私を「お姉さま」と呼びなさい。

だから、そんな要求も、歩はやすやすと受け入れられた。正直なところ、実際に口にするだけでも背中がムズムズする。けれどもそんな羞恥さえ、まるで彼女に服従しているような倒錯的な快感となつて、歩を激しく悶えさせた。

「お、おねえさま……おねえさまあ………」

甘えるように、自ら唇を擦りつける。四歳年上の恋人は、そんな歩に愛玩動物でも見るように眼を細め、そして、少し強めに吸いついた。

「ン、ふあっ!!」

たったそれだけで、目蓋の裏で火花が散った。仰け反りそうになるのを、瑠歌が引き留めるようにして抱き寄せる。歩は、喘ぎながら彼女にしがみつくので精一杯。わずかな唇の蠢きさえ敏感に感じ取り、緊張と興奮で身体が小さな痙攣に打ち震える。

「あ、あ………!! ふあ………?」

頭が真っ白になりそうになった時、不意に、彼女の唇が離れた。塞がれていた口が自由になって楽になったはずなのに、むしろ胸が苦しくなつて、歩は短い呼吸を繰り返した。

「ふ、は……あ、あふ……。おねえ……さま……」





「こういうの、嫌じゃない？」

自分も脱ぎながら恐る恐る尋ねてみると、うつとりと眼を閉じていた紗雪は小さく首を振り、そして、恥ずかしげに口元を隠しながら肩を竦めた。

「わたし、本当は……………エッチ、なんです」

「は、え？」

意外な答えに、パンツを床に落とそうとしていた歩の手が止まる。

「いつもいつも、いやらしいことばかり考えて……………それにわたし……………女の子が好きで……………女の子同士のことを想像して……………その……………あの……………自分で……………でも、こんなこと、誰にも言えなくて……………」

ほとんど聞き取れないほどの、蚊の鳴くような声の紗雪。口籠もって当然の内容なのだけど、なんだか雲行きが怪しい。歩が想像していたのと方向が違う。自慰まで匂わせる衝撃の告白に、背筋を冷たいものが走る。

「でも、思いついて夜々ちゃんに告白したら、夜々ちゃんもわたしのことが好きって言うてくれて……………女の子同士のキスやエッチも、すんなり受け入れてくれたんです。わたし、本当に嬉しくて……………その時は泣いちゃいました」

「そ、そうなんだ……………」

彼女の指が、歩の腕をなぞり上げる。ピリピリする静電気のような痺れと、彼女の告白の内容にクラクラ目眩を起こし、ほとんど生返事。

（えっと……あれ？ 夜々ちゃんの方からエッチを迫ったんじゃないの？）

停止しそうな思考をフル回転させ、必死に考える。これでは想像と正反対だ。夜々の言いなり人形という前提が崩れ、自立を促す計画も根底から覆される。

「だから、歩おねえさまが移籍してくるって聞いた時は、本当に邪魔って思ってた……しかも、夜々ちゃんとのエッチを見つけた時は本当にショックで、もう終わったって思ってた……」

「そ、そうだよね。ごめんね」

その部分は想像通りなのに、パニックを起こした頭は、もう半分も理解できていなかった。どう計画を立て直せばいいのか、思考がちつとも働いてくれない。混乱している間にも、彼女は仔猫のように歩の身体に擦り寄りながら、どんどん話を先に進めてしまう。

「でも、歩おねえさまもわたしと同じだったなんて、びっくりしました」

「ええ、そう。わたしも同じ……て、なにが？」

「んふ……それは……ね」

すると紗雪は、今までに見せたことのない満面の笑みで歩の首に腕を回すと、熱い吐息を吹きかけるように、耳に囁きかけてきた。

「女の子同士のエッチが、大好きな人ってことです」

「——！ そ、それは違……いや違うないけど………きやあっ!!」

あっと思った時には身体をひっくり返されていた。言い訳を考えていた歩は、瞬く間に

彼女に組み伏せられてしまう。そして――。

「おねえさまあ……」

「ん……むっ!？」

抵抗すら許されず、唇を塞がれてしまった。綿菓子のような甘さと柔らかさに、一瞬、心を奪われて、でも慌てて振り払う。

「ちょ、待ってキスは………あん、ンむう!」

「おねえさま……は……キスは、嫌い?」

「き、嫌いじゃないけど……でも、でも……」

「よかったあ……。ああ……歩おねえさまあ……。ん、ちゅ、ちゅぱっ……ちゅううつ」

「んあっ……! 待って、だから……キスは……あ、はあ……あふ、みゅうううつ」

遠慮がちに、でも絶対に逃がさないとばかりに紗雪が吸いついてくる。

(キスは駄目って、おねえさまに言われてたのに……!)

完全に油断していた。というより、パニック状態になっっている中で、対応なんてできなかった。唇を固く閉ざして抵抗する。けれども彼女は、それがキスに不慣れなせいだと解釈したのか、少しも慌てることなく、閉ざされた門を舌先でノックした。年下の娘に余裕の態度を取られるのは、少しばかり癪に障る。なのに、塗り込まれる温かい唾液に心が溶かされてしまいそうだ。

(ああ……おねえさま、ごめんなさい……! でもあたし、これ以上は………あう!?)

ブラに包まれた胸が、不意に疼いた。紗雪が、顔に似合わない巨乳を揺らして、硬直した桃色突起を擦りつけている。厚いカップを掠めているだけなのに、まるで直に乳首同士が触れ合っているように、心地よい痺れが胸から頭に這い上がる。

「あ……あつ……はあああ……!!」

まるで無数の指に首筋をくすぐられているかのように、仰け反りながら喘ぎを漏らす。その隙を逃さず、紗雪が口腔に舌を挿し込んだ。同時に脇腹を逆撫でされて、反射的に吸いついてしまう。

「んんッ、みゅふうううッ」

紗雪の背中に腕を回してしがみつки、快感に耐える。彼女は嬉々として、ふわふわの舌を口腔内で縦横無尽に動かしまくる。歩も応戦しようとするけれど、にわか仕込みの舌使いでは経験を積んだ彼女には敵わない。口の中から追いつ出そうとして逆に搦め捕られ、快感の味を擦り込まれていく。舌の表面をねっとりとし舐め上げられて、堪らないゾクゾクに背中が浮き上がった。

「あぶ……ぶあ、あふ、ん、あつ……あ、あ、あ……はうああああ……」

「ふふっ、歩おねえさま、可愛い……」

彼女は歩を見下ろしながら、唇についた唾液をぺろりと舐めた。淫靡な表情に戦慄が走る。その眼は、すでに内気な年下の少女のものではなく、獲物を組み敷く肉食獣のもの。それからすでに一時間以上。歩は身体中を弄ばれていた。上半身は主に舌や唇で。下半

身は指や爪で。どこを触られても敏感に反応し、すでに息も絶え絶えになっている。

「はあ……」

紗雪が、瞳をとろんと蕩けさせながら口に舌を挿し込んできた。もう拒むだけの気力はない。自らも舌を絡みつかせ、唾液の混じり合う粘着音に昂つてしまう。

「あふ、ふは……さ、紗ゆ……んあ……はあ、はあ……あむつ、ちゆ、ちゆば、ちゆ、ちゆるる、じゆるつ」

身悶えるたびに火照った肌が擦れ合つて、そこからも心地いい快感電気が生まれて身体を震わせる。その振動がまた摩擦を起こして、身体を重ね合っているだけなのに、どんな性感が高まっていく。紗雪を懐柔する作戦のはずだったのに、このままでは自分の方が快感に流されてしまう。

（あ、あれ？ でも、これでいいのかな……？）

経緯はどうあれ、彼女を自分に夢中にさせられるのなら、目的を果たせるんじゃないだろうか。それでいいのか、思考が鈍って判断ができない。ともかく、瑠歌のお許しも出ているのだから、今はこの気持ちよさに浸りたかった。キスの言い訳は後で考えenとして、紗雪の身体を掻き抱き、夢中で唇を擦りつける。

「あはあ……あ、歩……おねえさまあ……」

彼女も歓喜の表情で、乳房と乳房を擦り合わせる。ずれたブラの隙間から、彼女の指先が侵入する気配を感じた。乳房が直接的な刺激を期待して、ただでさえ硬くなっていたそ

の身をさらに強張らせる。

でも、指先は乳房の中腹を撫でるばかりで、なかなか先に進まない。じれったさに、身体を揺らして催促すると、今度は下半身で動きがあった。内腿で蠢いていた五本の指が、下着との境界線、鼠径部の窪みを辿ってじわじわと中心部に近づいていく。さらに快感への期待が高まって、割れ目が淫蜜をじわりと漏らし、下着に染み込ませる。まるで失禁したような感覚に焦り、内腿を強張らせる。

（どっち……？ どっちから来るの……？）

焦らされ、待ちきれなくなった歩は、当面の快感を求めて舌を伸ばした。熱い吐息が近づいてくるのを感じ、彼女の唇を自ら迎え入れようとして頭を起こす。

「歩おねえさまの、エッチ」

嘲るような囁きにハツとして眼を見開いた瞬間、乳首と淫裂に、まったく同時に電流を流された。ブラから飛び出した乳蕾をキュッと摘まれ、ずらした股布から露出した淫裂をずるりと擦り上げられる。

「はあう！ はッ……はあ、あああああつ！」

待ち望んだ快感に襲われ、歩は恥も外聞もなく歓喜の喘ぎを迸らせた。彼女の指が潰すように乳首を転がす。股間では恥蜜を掻き混ぜるように秘唇を弾く。激しくしたり痛くしたりするわけじゃない。動きだって速くはないのに、まるで指先からいやらしい電波でも発しているかのように、痺れにも似た快感が身体の奥深くにまで浸食してくる。

「乳首、ピンクできれい……。それに、こっちも……。あはあ……。柔らかくて、熱くて……。それに、いっぱい濡れてる。やっぱり、女の子に触られるのが好きなんです。歩おねえさまのエッチ……」

「い、言わないで……。恥ずかし……。ふ、あつ、あ……。う、あ、あ、あつ！」

彼女の言葉を否定したいのに、小刻みに悲鳴を上げることしかできない。意地悪なことを言われるたびに、秘裂からとろとろと淫液が流れ出す。

「ほら、いっぱい濡れてきた。やっぱり、歩おねえさまはエッチです」

「だ、だからそれは……。ふはっ、はッ、ああああ……。うくっ、くふううん」

反論しようとするたびに唇から唾液が零れ、それを言葉と一緒に飲み込む羽目になってしまう。彼女の指が膣口を捉え、淫水を掻き出すように入り口付近をなぞり、くすぐる。するとせっかく飲み込んだ唾液が再び流れ出し、顎を伝って喉まで小さな川を作る。それを逆流させるかのように、紗雪の舌が思いきり舐め上げた。

「ヒッ、ふあああああつんぷっ！」

そのまま唇に突っ込んで、激しく口腔を掻き回す。ビリビリと痺れるような快感が頭を突き抜け、歩は堪らず彼女を抱き締め唇を押しつける。

「あふ、んぷ、んむ、ちゅ、ちゅば、ちゅ、じゅる、ちゅッ」

「んふ、あゆむおねえひやまったりや、上のおくちも下のおくちも、とりよとりよお」  
「き、キスしながらや喋らにやいれ……。ひっ、きゅふうううっ」





言い争う夜々と紗雪。グループ解散。悲しむ紗雪。怒る夜々。恨みの籠もった眼で歩を見る、ふたりの少女――。

明るい未来がなにひとつ見えてこない。瑠歌が喜んでくれる場面すら浮かばない。このふたりを悲しませておいて、胸を張って彼女のもとに帰る自分が想像できない。

（そうだ。悪いのはあたしなんだから……）

正直に謝って、許しを請おう。そうすれば少なくとも、ここで彼女たちが争うのは回避できる。

「や、夜々ちゃん待って！ 実はこれは……」

弾かれたように上半身を起こす。けれど、そこから言葉を継げなくなった。深刻になる歩とは対照的に、夜々と紗雪が交わす会話に緊張感がない。

「紗雪ちゃんって、本当にそこを舐めるのだけは上手にならないよね」

「だってえ……どこまで触っていいか分かんなくて、怖いんだもん」

「そっちの方が分かんないわよ。指で触る方が、加減が難しいと思うんだけど」

「指は自分で練習できるけど、舐めるのはそうはいかないから……」

普通なら、友達同士でもできない赤裸々なエッチの話。彼女たちは恋人同士だし、それほど不思議ではないけれど、それならば、あの隠しごとはなんだったんだろう。状況が飲み込めず混乱する歩を、彼女たちは舌舐めずりするような淫靡な瞳で再び見下ろした。

「じゃ、紗雪ちゃんは休憩してて。夜々がお手本を見せてあげる」

夜々が紗雪と交代する。けれど肝心の歩は、聞きたいことがたくさんあって整理しきれず、ぴったりと脚を閉じたまま。そんな心情なんて知る由もない彼女は、強引にこじ開けようとした。それを見かねた紗雪が横から口を挟む。

「ちよつと夜々ちゃん。歩おねえさまは病み上がりなんだよ。それに……それだけじゃなくて、元気がなくて……」

「分かってる。だから、なおのこと元気づけてあげなくちゃ」

よく分からない理屈で、妖しく微笑みながら膝にキスした。唇をねつとりと押しつけられて、鎮まりかけていた快感が、瞬く間に再燃する。

「思うところは色々あるでしょうけど……今は、夜々に身を任せちゃってください」

それでいいんだろうか。混乱が、迷いと戸惑いを加速させる。でも、確かに、できるなら難しいことから目を逸らしたかった。なにを考えても大切な人のことを思い出して、重い不安に胸が押し潰されそうになる。

（知りたいことは……後で聞けばいいや）

瑠歌と違って、彼女たちはここにいます。仲良くできていられるならば、なにも問題なんてないはず。それでも、胸につかえたなにかが取れない。

歩は、それを無視した。今は、夜々の淫靡な瞳に惑わされてしまいたかった。

「……………ふふっ」

身体から力を抜くと、それを感じた夜々が目を細めた。膝から腿、そして内腿へと、脚を開きながら唇を這わせる。時々道草を食うようにチュツと吸われると、それに反応して小さく腰が跳ねた。気持ちよさに集中しようと、眼を閉じる。

「ふ……あ、ふあ……あつ」

歩の肌は、過敏なほど愛撫の動きを捉えた。見えていなくても、脚に触れる彼女の唇が微笑の形になっているのが分かる。まるで快感にすがっている姿を嘲笑されているみたいで、羞恥と屈辱に肩を竦ませる。

恥ずかしい。なのに、そう感じるだけで、歩は身体の中心が熱くなるのを感じた。尽きることを知らない淫蜜が、ぱっくり開いた恥裂から滴り落ちる。きつと夜々に見られていく。彼女の愛撫を見学している紗雪だつて凝視しているに違いない。

「あはあ……美味しそう……」

溜め息のような夜々の感嘆に内腿を強張らせた瞬間、素早く動いた彼女の舌が、つるりと股間を舐め上げた。

「ふ、あッ、あう!!」

しかしそれは恥裂の縁。直に性器には触れていない。でもそうとは思えないほど、激しい歓喜がお腹の奥に突き刺さった。陰唇に触れるか触れないかのギリギリを、細かく動く舌尖がくすぐり続ける。

「や……やあ！ 早く……はや、く……お願い、もう……!」

どうしてみんな、歩を責める時に長時間にわたって焦らすんだろう。それはそれで気持ちいいけど、その悪い癖には恨みさえ覚える。自ら腰を動かして性器を押し当てにいったら、巧みにかわされ鼠径部を吸い上げられた。

「ちゅ。ちゅうううっ」

「あ、う！ ああああう!!」

快感電流がピリリと背中を走る。吸われるごとに、ひと舐めごとに思考力が剥ぎ取られていく。空中であがく手を、誰かが握った。紗雪だとは思うけど、閉じた目蓋の裏で火花が散って確認できない。快感で痺れて暴れる脚を夜々が担いだ。お尻が浮いて舐めやすくなったのか、舌の動きがより繊細になって、さらに割れ目のギリギリを責める。それでも触れてもらえない陰唇が、蠢きながら涙を流す。

「だめ……だめ、もう……限界っ!!」

そう叫ぶと同時に、淫核が逆撫でされた。ざらつく舌での強烈な摩擦に、一瞬、軽く意識がどこかに飛ぶ。

「ひは!? あ……あッ!!」

性器が急激に収縮し、まるで水鉄砲のように愛液の飛沫が飛んだ。夜々はそれを正面から受けながら、意に介することもなく陰唇を舐め続けた。今度は焦らしとは正反対。遠慮も容赦もなく、襷と粘膜をぐちゃぐちゃに掻き回す。

——くちゅ、くちゃ、ぴちゅぴちゅ、じゅば、じゅるっ。

「あ、ああああ………それ………それえ………!!」

夜々のクンニは、乱暴なようにいて繊細だった。肉壁を震わせ、割れ目の奥の粘膜を舌で何度も往復する。歩の感じるポイントを探り当てて、そこを執拗に責め続けた。気持ちよすぎて涙が溢れる眼をうつすら開けると、紗雪が、恋人の披露する舌技を、息を飲んで見詰めていた。

「すごい………こんなにしているんだね」

「分かった？ 今度は紗雪ちゃんがやってみて」

唇に付着した淫蜜を口移しするように、夜々が紗雪にチュッと口づけ場所を譲る。なんだか自分の身体を練習台にされている気分だけど、気持ちよくしてもらえるなら、なんだって構わない。紗雪は、めくれていたTシャツと、そしてスカートも脱いで下着だけになると、歩の股間に屈み込んだ。

「はあ………」

ぺろりと、舌を押しつけてくる。さつきとは違い大胆に。夜々の愛撫を見てちゃんと学習したのか、躊躇なく淫裂の奥深くにまで舌を挿し込む。

「ぺろ。ぺろぺろ、ちゅっ、ちゅるっ」

「あ、ン、あっ、ンく………んンッ!!」

クリトリスまで吸引されて腰が暴れた。紗雪は腿をがっちり抱え、顔を斜めにしながら唇と陰唇をびったりと密着させた。短い時間ですっかり卑猥なキスに慣れたのか、溢れる

蜜を大きな音で啜り上げる。

「じゅ……じゅるる、じゅる、じゅぱっ」

「ふあっ！ やああん。そ、そんな音たてちゃ……だめええ……」

「ん……でも、いっぱい溢れて、零れちゃう……。あふ、ちゅ、ちゅるるっ」

自分の身体がそんなに濡れていることが信じられなくて、でも絶え間ない水音を聞かされて、耐えがたい羞恥に、強張る指で顔を覆う。

「んふふっ。紗雪ちゃん、その調子」

恋人の成長を微笑みながら見守っていた夜々は、全裸になって歩の上に被さった。顔を掻き毟る手を取り、指を絡めてベッドに押さえつけ、唇を重ねてくる。

「あ、あふっ、ふ……みゅふうっ」

歩は喘ぎながら舌を求めた。くるくると巻きついてくる彼女のそれを夢中で追いかけて、吸いつこうとする。喘いでいるうちに口の中に唾液が溜まり、激しく掻き回される。自分の身体の上と下で響く粘着音に、羞恥以上の興奮を覚えて快感にのめり込んだ。夜々の口腔に舌を突っ込み、彼女の唾液を掻き集める。身体の中も外も媚電流が走り回って思考がどんどん薄れていく。なにも考えたくない。

「ん……よいしょ」

さらに淫裂を舐めやすいように、紗雪が歩の脚を大きく広げた。

ダンスで鍛えた柔軟な身体は、彼女の要求以上のはしたない角度で開き、惜しげもなく

秘部を晒してしまう。

「ふふっ。歩おねえさまだったら、そんなにいやらしく脚を開いて……。こんな格好、エンブレイスのファンが見たら、すっごく興奮しちゃいますよ？」

「いや……それ、言わないで……」

「だめだめ。アイドルにプライベートはありません。いついかなる時も、誰に見られてもいい自覚が……。あんっ……………んっ」

夜々のお喋りをキスで遮る。それは今、一番忘れてしまいたいことなのに。歩が嫌がる姿を面白がつてからかっているだけなんだろうと分かっているけど、恋しい人の姿が脳裏にちらつき、辛くなる。それを振り払おうとして無我夢中で唇を貪る。

「歩、おねえさま……」

快感に溺れているのとは違う、歩の必死な舌使いに、夜々もなにか感じ取ったらしい。軽口をやめ、真剣にキスに応じた。たっぷり唾液を交換し、つるつと口腔から抜いた舌を頸動脈や鎖骨、そして胸へと這い回らせる。

「んく……ん、くっ……うううん」

乳首を甘噛みされて、軽い痛みで恥裂から蜜が漏れる。それを掬い取った紗雪が、クリトリスに歯を立てた。

「ヒッ、ひいひいっ!!」

敏感な蕾を上下で同時に噛まれ、激しい快感電流で背中が仰け反る。しかも夜々は、再





度、しかもさつきより強めに乳首に歯を食い込ませた。ヒリヒリ痺れる硬膏を、温かい唾液で癒す。囁んでは舐め、舐めては囁んでを繰り返されて、頭が真っ白になっていく。

「歩おねえさま……」

乳首を舐めていた夜々が、そこを軸にして、コンパスのように身体を百八十度移動させた。顔の上に、彼女の乳房が浮かぶ。薄いピンクに染まった先端が、物欲しそうに迫ってくる。歩は首を伸ばし、その小さな突起を口に含んだ。

「あんっ」

唾えただけで、歓喜の声がした。その可愛らしさに背が痺れ、身体を抱き寄せ夢中で吸いつく。彼女も再び歩のものに舌を絡めた。互いに相手の乳首を弾き、震わせる。

「ん、あっ……歩おね……さま、あん、ん、ちゅ、じゅる、ちゅうううっ」

「はあう！ 夜々ちゃん……夜々……ンあ、ちゅばちゅば、ちゅー！」

胸と胸で快感が循環し、増幅していく。すると夜々に負けまいとするように、紗雪の唇も激しさを増した。腿の裏を持ち上げて、最初の躊躇など微塵も感じさせない強さで舌を押しつけ、膣前庭を舐め上げる。

「ちゅば、じゅるじゅる、ちゅ、れろ、じゅばっ」

「ふみゅううううっ！ ふううあああああっ！」

清楚な外見の紗雪が奏でる音に、背筋も頭も卑猥に痺れた。膝や脚の付け根も指先ですぐぐられ、腰がカクカク踊り出す。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの  
桃色パスタァー

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レベル！

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

二次元ぶち文庫

姫騎士 クラスメイト！

ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫

小説家になるこの男性向けサイト  
アクトアインノベルズに  
から書籍化！

異世界で  
デキる未来は  
いかがでしょうか？

ドキドキラブな  
ハーレム系  
ライトノベル！

戦うヒロインを屈服させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル！

あの人気作品の  
外伝作品もあり！  
電子書籍しか読めないエロチカヘル！